

# 大東文化大学 東洋研究所所報

2015.12 No.64

## 目次

巻頭言 大橋 英五……………1	第2回講座概要 生田 滋……………2
公開講座「アジアの民族と文化」 第1回講座概要 中村 聡……………2	第3回講座概要 山田 準……………3
	東洋研究所の理念・目的……………4

## 巻頭言

大東文化学園 理事長 大橋 英五

東洋研究所は大東文化大学の研究・教育の基本的な理念のもとで、その活動が続けられてきました。こうした活動を長い期間にわたって継承されてきた先輩たちに感謝いたします。

今日では、限られた資源のもとでその活動が継承されざるをえない状況にあります。活発な研究活動、出版物の公刊、公開講座による社会への発信、また国際交流などを進められています。

東洋研究所の研究活動は、本学の伝統、蓄積のなかで、きわめて水準の高い内容であることはいうまでもありません。しかし、日本の社会は、近年、大きく変化してきています。この変化は、東洋研究所のあり方、発信の仕方に課題を投げかけてはいないでしょうか。

近年の社会のグローバル化が進むなかで、私たちは、東洋への関心がうすれてきてはいないでしょうか。あるいは東洋への関心のみでなく、日本についての関心さえもが希薄になっていないかとさえ思われます。

社会がグローバル化するなかでは、単に国際的な視野、感覚を身につけることだけではなく、自身が育った国・地域の文化、暮らし方を身につけることが、一層大切になるのではないのでしょうか。東洋を知り、日本を知り、育った地域の文化を身につけることはますます大切になってくるように思われます。自分自身のあり方、身につけた文化をはっきりとした形で認識することが大切ではないのでしょうか。

そうでなければ、世界の中では、世界をただよう根なし草のような存在になってしまうのではな



いでしょうか。

日本の文化の根幹にある東洋について理解を深めることは、私たちにとっては、今や、とても大切なことであるように思います。東洋の文化、日本固有の文化を自分なりに位置づけることによって、世界についての理解を正しく位置づけることができるのではないのでしょうか。

東洋の研究は、東洋という範囲に限られたものではなく、日本の理解、欧米の理解、世界全体の理解にとって大切なものです。

そうした意味で、大東文化大学で続けてきた東洋の研究は、今日、ますます重要な意味をもっていると思います。東洋研究所が東洋研究の専門家たちの高いレベルの研究であると同時に、これまで以上により一層、広く大東文化大学の学生また一般の人たちへ東洋の文化についての研究を発信していただくことを期待しています。

(大東文化学園 理事長)

## 公開講座「アジアの民族と文化」

2015年度（第31回）東洋研究所公開講座は、「アジアの民族と文化」を統一テーマに下記の通り開催された。受講者総数は延べ90名（一般67名、教職員23名）で、各講座の概要は以下のとおりである。なお、長年ご出席いただいた方に対して行っている表彰状の授与は、今年は2名の該当者がいた。

### ◇第1回 11月5日（木）13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：プロテスタント伝来と東アジアの近代

講師：中村 聡（東洋研究所兼任研究員・玉川大学教授）

アヘン戦争に敗北した清朝は、イギリスを始めとした欧米各国と次々と不平等条約を結んでいった。不平等条約の下、開港を余儀なくされた開港地に渡ってきた外国人の中には多くのプロテスタント宣教師が混じっていた。彼らは学校の教師、医療従事者として中国に渡来し、居留地を中心としてキリスト教を広めていこうとしていた。ただし、先にアジアにやって来たカトリック宣教師たちは布教を禁止され、キリスト教の広まりは停頓状況のさなかであった。さらに、祖先神の扱いの問題など一神教における神の考え方があまりにも異なる東アジアの人々にキリスト教を理解させるためにはさまざまな問題が横たわっていた。新来の宣教師たちは、カトリック宣教師たちが志半ばで棚上げ状態にあった布教運動を新しい方法で立て直していった。

彼らプロテスタント宣教師たちは、カトリック布教禁止令の下で教会建設も促成らない中、文書による伝道を展開していった。これらの文書の中には、直接キリスト教の教義を説く文書もあれば、西洋の近代科学の紹介書もあった。キリスト教の布教書としては『天道溯原』（神の存在を証明する）『聖經圖記』（エッチング画が挿入された聖書物語）、漢訳西洋科学書としては『博物新編』（物理、化学、天文、生物等の初歩的な科学書）『地球説略』（世界地理と世界の国々の紹介）などが有名である。

中国が近代化に苦しんでいた同じ時期、日本でも幕末～明治という近代化の嵐が起こっていた。中国においてプロテスタント宣教師によって著された布教書、近代科学の紹介書は、半年を経ず幕末の長崎に舶載され、日本の近代化にも大きな役割を果たすことになった。

これらの書物を購入する目的で長崎に向出した集団が二つ存在した。第一のグループは幕府の学問所の一つであった「蕃書調所」の教授たちである。彼らは長崎でプロテスタント宣教師の著作を購入し、主にその科学書の中から幕府や庶民のためになるさまざまな工学的知識、地理的知識、理学的知識などを抽出し「幕府官本」を再編成しようとしたのである。日本でもキリスト教は禁止であったため、神やキリスト教に関わる部分はこの時点



で削られた。現在、公共図書館や大学図書館に所蔵されている上記の諸本の多くは、この江戸官本である。第二のグループは仏僧の集団、主に浄土真宗の僧侶集団であった。浄土真宗は大きな仏領を持たず、信者集団の信仰を拠り所としており、キリスト教が信者を横取することに大きな脅威を抱いていた。さらに漢訳西洋科学書がもたらす地動説は、須弥山説を頼りとして地獄・極楽を説く真宗の教えに大きな打撃を与えるだろうと考えた。江戸時代中期から排耶書が作られていたが、それはイエズス会などカトリックに対するもので、新来のプロテスタントに対する新しい排耶書を作るためには、直接その教理を学ぶ必要があったのである。これら真宗の僧侶たちが集めた宣教師たちの著作はその多くが大谷大学図書館に所蔵されている。

このようにして輸入されたプロテスタント宣教師たちの著作の影響は幕末に止まらず、近代化した明治前半にまで大きな影響をもたらすことになった。明治維新直後における日本の諸知識の中には、これら宣教師たちがアジアにもたらしたものが多々混じっていたと考えられる。

中国・日本という東アジアの諸国は、近代において改めてキリスト教と対峙せざるを得なかった。それを排除するのか、受容するのか。受容するとすれば、どのような方法をとるのか。西洋文明の先頭に立って押し寄せるキリスト教の扱いに、近代東アジアの近代化の方向性が問われていたのではないだろうか。

### ◇第2回 11月12日（木）13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：16世紀のヨーロッパ人の自己認識

講師：生田 滋（東洋研究所特別兼任研究員・大東文化大学名誉教授）

16世紀はヨーロッパ人にとって、初めて本格的な形で自分自身以外の人々と接触した時期であり、それまでほとんど他者との接触の機会をもたなかったかれらにとって、真の意味で、自分たちについて考える機会を持った時期である。かれらは最初アフリカの黒人や新大陸に住む人々と接触した時、まず第一に抱いた疑問は、「かれらは真の意味での人間なのであろうか」ということであった。しかしかれらがアジアに住む人々と接触した際には、かれらは最初からアジアに住む人々を自分たちと

同じ人間であると意識していた。1585年に書かれたイエズス会の宣教師ルイス・フロイスの『日本覚書』はそうした意味でのすぐれた文献である。フロイスは同書のなかで日本人について、鋭い観察の結果を記録しているが、それとともに、彼が日本人との接触を通じて、自分たちポルトガル人自身についての認識をも記録している。たとえば、彼は日本人の間での女性の地位の高さに注目しているが、それとは対照的に、彼はポルトガル人の方での夫婦の間、一族の間の情愛と精神的な絆の強いことを

述べている。しかし彼はそれと同時に、自分たちの間では、女性の地位の低いことを指摘している。しかし彼はヨーロッパ人は、信理を学ぶために、書物を勉強することを、正しく指摘している。

また彼はポルトガルにおける軍隊組織についても若干の言及を行っているが、そこには16世紀の前半にマヌエル王によって行われた軍制改革の成果が依然として機能していたことを示唆している。

このように、ロドリゲスの記録は、ヨーロッパの歴史や文化の理解を助けるものと考えられる。

また1590年に『天正遣欧使節対話録』を出版している。これは彼がアレサンドロ・ヴァリニャーノの依頼を受けて、ラテン語で書かれたもので、四人の天正遣欧使節の対話という形で、一行の旅行記である。その中にいわば「ヨーロッパ概説」とでもいうべき部分がある。これがおそらくヨーロッパに関する総合的な記述としては最初のもので、前近代のヨーロッパを理解するために、きわめて有用な資料である。

ここで最後に指摘しておきたいのは、われわれにとってこの時代のキリスト教の布教活動は、即ヨーロッパ文明の優位性を示すもののように考えられている、それは事実ではないということである。これはいわば結果論的



な見方であって、実際には各修道会の中の激しい対立、嫉妬、競争の産物であるといっても過言ではない。確かにイエズス会のコレジオの教科書には、当時の最新の科学知識が含まれている。しかしこのコレジオは元来ヨーロッパ人を対象として開設されたものであって、宣教師は一般に日本人信者に対しては強い偏見をもっていた。また上に述べた天正遣欧使節も、イエズス会のフランシスコ会、ドミニコ会などに対して、イエズス会の布教地域である日本を守るための一手段であったことは否定できない。こうした背景を理解すると、鎖国を「日本の悲劇」とする和辻哲郎のような見解には、修正の余地があるのではなかろうか。

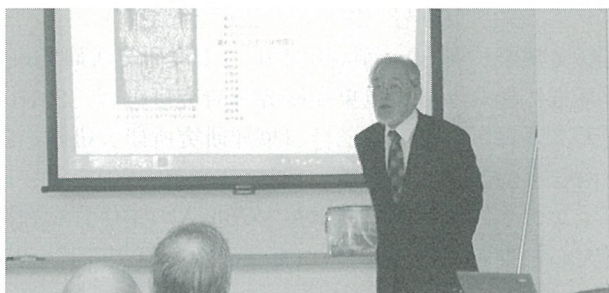
### ◇第3回 11月19日(木) 13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：オランダも隠れキリシタン？

講師：山田 準 (東洋研究所専任研究員・大東文化大学教授)

1600年のオランダ船リーフデ号と名付けられた船が、大分県臼杵に來航したことにより日本の歴史を大きく変化させることになった。先にスペイン・ポルトガルのカトリック国は日本国内にイエズス会を中心に布教活動を始め、南蛮貿易によって日本人女性を奴隷として海外に売り飛ばしていた。リーフデ号に乗船していたイギリス人ウィリアム・アダムスやオランダ人ヤン・ヨーステンは、徳川家康に気に入られ、外交顧問として様々なアドバイスやイエズス会宣教師批判を展開し南蛮貿易の危険性を進言した。その結果、禁教政策の強化が行われ、宣教師の国外追放やカトリックの弾圧、仏教徒への転びを推し進めて行った。キリシタン達は指導者の宣教師を失い、日本各地に潜伏し、潜伏キリシタンとして1873年の禁教解除まで隠れ住んでいた。しかし、解除後もカトリックに戻ることなく、日本独自のカクレキリシタンとして伝統を守り続けている。このようにオランダ船來航はカクレキリシタン誕生のきっかけにもなっていると言える。

そもそもオランダはスペインから独立すべく80年戦争を戦っている最中であり、日本來航のリーフデ号はエラスムス号として1598年にロッテルダムで艀装された5隻の船団の1隻であった。この船団の第1の目的は南米で活動するスペイン船を襲撃し、奪った金貨でアジアの香辛料を買って帰国することであった。第2の目的は、第1の目的が失敗した時は黄金の国ジパングを目指し、貿易を行うことであった。南米へ向かう水先案内人として英国人パイロット、ウィリアム・アダムスを雇い出航したものの、第1の目的に失敗。船上会議で第2の目的日本を目指すことになった。九州西岸にはすでにポルトガル船やカトリック宣教師達が上陸しており、手薄な九州東岸を目指し、船尾像のエラスムス像はカトリックを痛烈に批判し、ルターに多大な影響を与えプロテスタント誕生のきっかけを作った人物であり、このまま日本に



向かうのは危険と判断し、船尾像を船倉に隠し、船名もリーフデ号として來航した。無事日本に到着したリーフデ号は家康の命により大坂から浦賀に回航された。元氣になった乗組員の砲手達は関ヶ原の戦いに駆り出され、家康に協力したことが、宣教師達の記録によって記されている。ヤン・ヨーステンに託されたアダムスの手紙は英国に届けられ、オランダ船が日本に到達していることが、1602年に設立されたオランダ東インド会社の船に伝えられた。オランダ国王は家康へ通商の許可を求める親書を1609年に届け、平戸に商館を作ることを許されて通商が始まった。オランダはキリスト教布教より貿易を目的として通商が認められていたが、平戸商館を出島に移転することを命じられたとき拒否していたが、西暦年の1609と書かれていたこと。島原の乱の原城を砲撃することを依頼され、拒否は通商中止が宣告されたため、出島に移転せざるを得なかった。出島移転後は蘭学が盛んになり、西洋の学問を伝えたが、キリスト教関係は伝えられなかった。オランダ人にとって12月6日のセントニコラス祭やクリスマスは何とか祝いたい行事である。「オランダ冬至」、「オランダ正月」として宴会が模様され、蘭学者達にも伝えられた。このように貿易を維持するため、プロテスタントの行事を隠しながら出島で生活をしたオランダも隠れキリシタンではなかったか？

## 東洋研究所の理念・目的

東洋研究所の起源は1921年の貴・衆両院による「漢学振興二関スル建議案」の決議に由来する。この背景にある基本的理念は、①漢学を中心とする東洋学術の研究、②東西文化の融合による新しい文化の創造をめざすことにあった。この理念実現の推進母体として1923年大東文化協会が創設され、研究組織として、①漢学を中心とする東洋学術の研究部門として東洋研究部を、②東西文化の融合による新しい文化の創造をめざす比較研究部を設け、教育機関として大東文化学院を設立した。この二つの研究部は1953年学校法人大東文化大学付属大東文化研究所に継承され、1961年学校法人大東文化学園の振興計画の一環として、新たに「東洋研究所」として過去の①・②の理念を継承している。

東洋研究所の目的は、学則第6条に基づく大東文化大学東洋研究所規定によって定められ、「アジアを中心とする人文・社会・自然の科学的調査研究を行い、広く学術の発達に寄与すること。」とされている。当初研究局第一部人文科学系と第二部社会科学系の2組織がおかれ、その後専任研究員の就任に伴い人文科学班、政治・経済班、国際関係班の3班に分かれての研究活動に入った。時代の要請に従い個人研究はもとより、学際的・総合的共同研究の重要性を強調し、学際的メンバーによる研究部会を設け、研究成果を学術雑誌『東洋研究』に掲載するとともに、刊行物を発行し世に成果を問うている。また、研究成果を地域社会への還元として公開講座を開催し、国際交流の一環として、外国人講師による講演会等学術の発達に寄与することを目的に活動している。

## 2015年度 東洋研究所刊行物

- 『東洋研究』 196号 (2015年7月発行)  
197号 (2015年11月発行)  
198号 (2015年12月発行)  
199号 (2016年1月発行予定)
- 『藝文類聚』 巻89 訓読付索引 (東洋研究所研究班編 2016年2月発行予定)
- 『茶譜』 巻八 注釈 (東洋研究所研究班編著 2016年2月発行予定)
- 『天文要録』の考察 [二] (東洋研究所研究班編 2016年2月発行予定)
- 『西安事変と中国共産党』 (岡崎邦彦著 2016年2月発行予定)
- 『インドア領の成立とポルトガル人の定住』 (齋藤俊輔著 2016年2月発行予定)
- 『天心と東西文化の融合』 (東洋研究所研究班著 2016年2月発行予定)

### 刊行図書取扱店

#### ■汲古書院

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-5-4  
TEL (03) 3265-9764

#### ■池上書店 (大東文化大学板橋校舎内)

〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1  
TEL (03) 3932-7567

#### ■東方書店業務センター

〒175-0082 板橋区高島平1-10-2  
TEL (03) 3937-0300

#### ■進明堂 (大東文化大学東松山校舎内)

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560  
TEL (0493) 34-4430

### 大東文化大学東洋研究所所報 No.64

2015年12月25日発行

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10

TEL (03) 5399-7351 FAX (03) 5399-8756

E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www.daito.ac.jp>

印刷 (株) 東京技術協会